

明日は明日の風が吹く

仲川 浩世

英語教員として働き、新たな環境、本学大阪女学院大学・大阪女学院短期大学で教壇に立つことになった 2020 年 4 月。想定外の新型コロナウイルス感染拡大の影響で、9 月の秋学期までキャンパスの教室で指導することはできなかった。教歴がある程度あったとは言え、初めての経験であり、戸惑うことも多かった半年間である。現在 12 月となり、この 1 年を振り返ると、オンライン授業と対面授業とでは、学習者との向き合い方について、共通点もあれば、異なる点もある。

演習形式の英語の授業では、学習者との対話が不可欠となる。英語四技能を指導していくうえで、質問を引き出し、自分で問題解決することを導くことが教員の役目であるからだ。確かに講義形式の授業では、学習者は受け身となり、教員が一方的に知識を提供するということもある。しかしながら、少人数で基礎英語力向上をねらいとする授業では、教室内のコミュニケーションが果たす役割は大きい。オンライン授業となった当初は、それが不可能になってしまうのではないかと感じたこともあった。実際は、Zoom や Skype などを利用することで、より柔軟にスケジュールを設定し、個人的に面談をすることもでき、必ずしも悪い面ばかりではないということも明らかとなった。

さらに、教員の質を高めるためのセミナー、学会なども Zoom で頻繁に開催されるようになり、あらゆる地域の人達との交流が可能となった。地球が狭くなり、本当の意味でもグローバル化へと発展し、さらにオンライン上の様々な勉強会が活性化されるであろう。

これからの時代に見合う教師力とは何であろうか？ 高度な英語力、指導力、コミュニケーション能力、高度な情報リテラシーの知識も含まれるだろう。従来ならばそれだけで十分であったかもしれない。今後は何が起こっても対応できる「問題解決能力（度胸）」が求められると考えられる。

未来に何が起こるかは想像できないが、それに対処できる強さを身につけることは、可能であると信じていたい。「一歩ずつでも学生と共に成長していく先生」になれることを願って、また明日の授業の準備をしよう。

(なかがわ・ひろよ 教授/教員養成センター)